

高齢社会の困難を乗り越えて、
次世代に希望をつなぐ

地域見守り電話「あんしん電話」

未来へ

豊かな高齢社会システムづくり実践的調査研究報告 2021年4月

公益財団法人ニッセイ聖隷健康福祉財団

私の思いを地域にひらく



誰にも気づかれず、人が孤独に亡くなるような町にはいけない。

安心して暮らしていく町を創ろう。

一人一人の声を受け止められる地域を創ろう。

この地域見守り活動は、自治会長さんたちの熱い思いから始まった。

緩やかに、そっと、途切れることなく

見守り続けていくために、

超高齢社会で、人の負担を最小限に、

でも温かい人のつながりを絶やすことなく

続けて行くために

どんな仕組みが必要か、

ワークショップを開いて考え続けた。

私の思いが、私の悩みが、地域の課題に

あんしん電話の仕組みを活用して、住み続けられるまちづくりのために、1対1の関係から《1対コミュニティ》の関係へ。「ケアする側」対「ケアを受ける側」の関係や「心配する個人」と「心配される個人」の関係を「町に暮らす人」と「受け止める地域」の関係にする仕組みを創ろう。

課題に向き合う姿

▶ 役員不足や高齢化に悩んでいた町会長

要支援者を含めた独居高齢者の見守りを1人で受け持っていた。毎日訪問しても個々の家に行けるのは2カ月に1回ほどで、その間に「誰か倒れてしまっているのではないか」と心配で、時には夜も眠れなかった。あんしん電話を地域に導入したことで「何かあれば連絡が入る」と、気持ちが楽になった。

▶ 認知症の発症に気が付いた

これまで、押し間違いもなく元気で過ごしていたのに、頻繁に押し間違いをするようになったと見守りステーションの診療所から見守りボランティアサロンに連絡があった。ボランティアが訪問して様子を確認したら、あんしん電話がかかってくる曜日を認識できなくなっていた。地域包括支援センターに連絡して、見守りは介護事業所が主になった。

▶ 地域のつながりが自然にできた

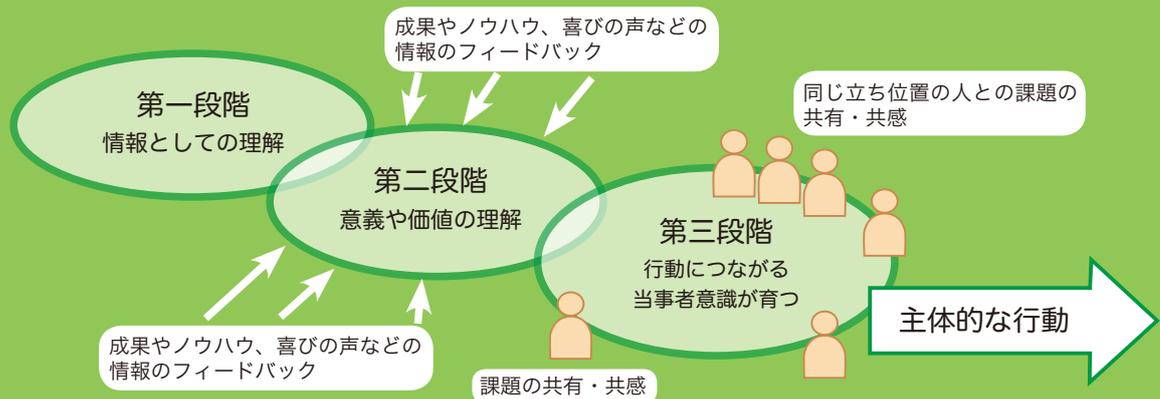
高齢者は腰が曲がってかわいそうとか、単なる老人としか見ていなかったが、人それぞれに歴史があることに気づき、尊敬の念が出てきた。誰もが高齢になるということが自分のこととして考えられるようになった。一緒に訪問するボランティア同士のつながりもでき、挨拶を交わす人が増えた。高齢になってもこのままこの町で暮らすことができそうだ。

主体的な行動はどのように引きだされるの？

「あんしん電話」の情報を知ると、次の段階では、成果や喜び、あんしんの声を聞くことで自分にとっての価値や地域の高齢者にとっての価値を感じることができるようになる。

さらに、同じような立場の人と共有・共感していく事で、自分にできること、自分でなくてはできないことを考え、自分の役割が明確になって当事者意識が育ち、それが主体的な行動につながる。

そして、互いに共感しあえる場があれば、思いついた最初の一人の行動は、仲間を呼び、より広く活発な活動となる。新たな意欲をはぐくみ、活動の場を持ち、情報交換と互いを支え合う関係を持つことができるのである。



3期 2017年報告書より

知恵と行動力が生み出した“しかけ”



▶幸谷町会の自主運営の仕組み

戸建て中心の閑静な住宅街である幸谷町会では、2012年に、安心電話システムの自主運営の仕組みを構築して見守り活動を開始した。町会で地域の診療所にシステム導入を依頼し、初期費用や電話代も町会負担で運営している。

地域に5つのエリアを設定し、各エリアに2人ずつボランティアを配置している。システム対応の見守りとは別に、利用者宅を月一定期的に訪問している。また、見守りボランティア定例会議を開いて、情報交換や個別のケースの検討を行い、活動中の不安や疑問を1人で抱え込まず、安心して活動に取り組める体制を整えている。

▶野菊野あんしん電話システム運営協議会の協力体制

「あんしん電話」を導入することをきっかけに、近隣の自治会・町会と医療・介護機関との間で安定した協力体制が築かれ、住民主体の活動を拡大し、「あんしん」を提供し合う輪を広げることが可能となるという好循環が生まれている。

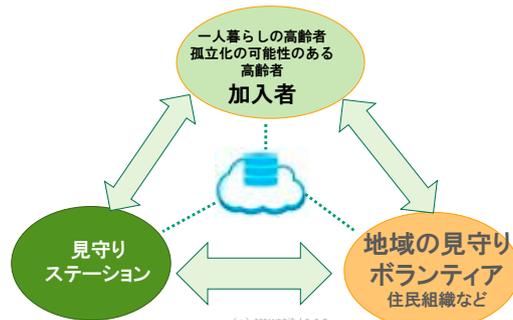


6町会共同企画元気フォーラム(2017年)のチラシ

理念の具現化 「地域見守りトライアングル」 の完成

孤立しがちな高齢者と、
地域の見守りボランティアと
見守りステーションの三者が、
互いの存在を気に掛け合う仕組みができた。
インターネットを介したサービス
(クラウドサービス) が導入され、
情報共有と支え合いの体制が強固になった。

うっすらと、途切れることなく、つながりを作る仕組み



地域見守りトライアングル

「あんしん電話」の進化形 クラウド型地域見守り電話「げんきです」の登場

自動応答電話による見守りシステムと、人と人がつながる見守りを組み合わせた
新しい形のコミュニティ型地域見守り



(1) 定期的に自動応答電話で見守り電話がかかってきます。



(2) ガイダンスにしたがって、ボタンを押します。



(3) 9番を押したら、見守りステーションから確認の電話が来ます。



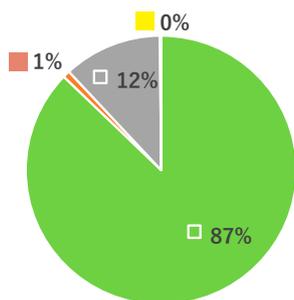
(4) 二日続けて応答がないと訪問して、安否を確認します。

ご利用の実態 (千葉県松戸市の事例より)

応答状況 (単位: 件)

元気です	連絡希望	二日続けて応答なし	訪問による確認
20,436	198	2,758	36

稼働世帯数: 506世帯
総発信件数: 26,701件
期間: 2019年4月~2020年3月



■ 元気です ■ 連絡希望 ■ 二日続けて応答なし ■ 訪問による確認

※松戸市の「あんしん電話」は、現在、従来システム(個別サーバー型)と新システム(クラウド型「げんきです」)が併存稼働している。

回答の状況と訪問回数 約9割の人が「元気！」と答えています!

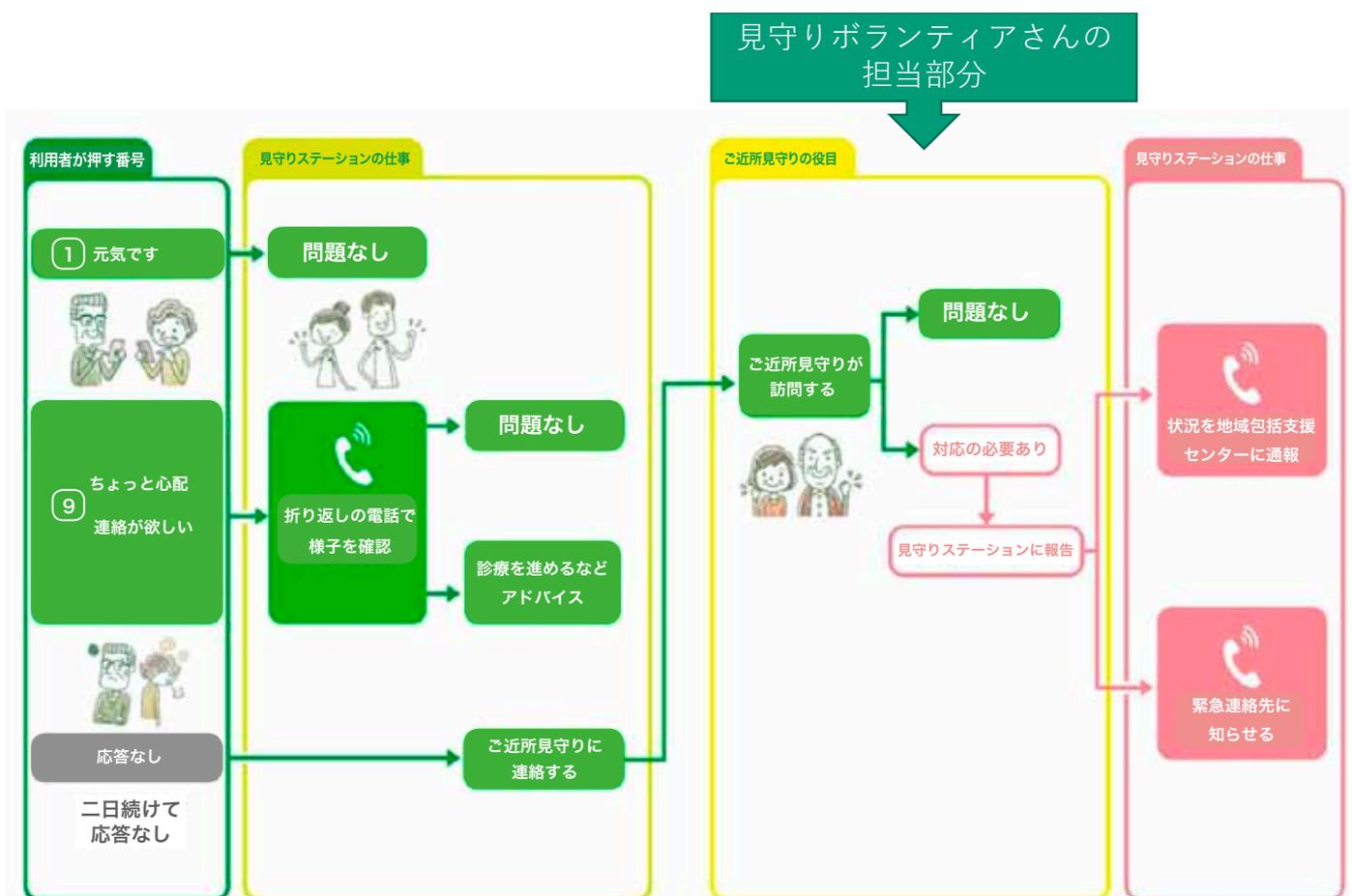
- ✓利用者の多くの方は、毎週、「元気ですよ」という発信を習慣にして、生活のリズムを作っています。
- ✓ご利用のもっと多い世代は、70代後半から80代の方です。
- ✓万一の時、気づいてくれる地域の方がいるのが心強いという感想が多く寄せられています。
- ✓2019年度の類似事業で、訪問した件数は、500世帯で、36件。不幸な事案はありませんでした。

(c)2021NPO 法人 CoCoT

必要がツールを進化させ、活動の蓄積は新たな仕組みを生んだ

自治会活動から生まれたクラウド型地域見守り電話「げんきです」の誕生

見守りステーションと見守りボランティアそれぞれの役割



クラウド型地域見守り電話「げんきです」の特徴

- ・定期的に、継続して、大勢の人を見守り続けることができる。
- ・だれでも、どこでも、いつでも、見守るべき人の状況を確認することができる。
- ・見守りボランティアの役割が明確で、安心して活動することができる。

「非営利型一般社団法人 あんしん地域見守りネット」の誕生

「非営利型一般社団法人あんしん地域見守りネット」は、自治会や地域活動団体のネットワーク組織で、委託や補助の形態で公共サービスの担い手となるために、公益性や信頼性が表明できる組織として設立された。自分たちの住む地域の利益だけではなく、広く地域全般の公共の福祉の推進を目的に掲げている（公益性）。また、明快な基準を持った会計処理を行い、情報開示を積極的に行うことにより公共性の高い組織（信頼性）となっている。

一般社団法人あんしん地域見守りネット 法人格の取得：2017年3月
会報誌の刊行：2020年10月創刊



あるといいね！ 草の根セーフティネット

住民の発意による見守り活動が政策に位置づけられた。

松戸市は、地域における「重層的な見守りの体制づくり」の柱の一つに、「日常的な見守り体制」を置いている。「緊急通報装置」と区別された「あんしん電話事業」は、その基盤となっている。

第5章 施策の展開

iv. 安否確認システムを活用した見守り活動の推進

ひとり暮らし高齢者を対象に緊急時にボタンを押すとコールセンターへ通報できる「緊急通報装置」の貸与や、自動応答電話の機能を利用して、週1回、利用者宅に安否を尋ねる電話を自動的にかけ、体調不良や要連絡等、プッシュボタンの回答を医療・介護機関が確認し、状況に応じて、地域のボランティアが利用者宅を訪問する等のシステム「あんしん電話」の活用を通じて、引き続き、高齢者の地域見守り活動を行います。

「いきいき安心プラン VII（第9期松戸市高齢者保健福祉計画・第8期松戸市介護保険事業計画）」
（令和3年度から令和5年度）より抜粋
https://www.city.matsudo.chiba.jp/matsudodeikiiki/mokuteki/sonota/ikiikiannsinnprann_7.html



地域包括支援センターに導入したら

地域包括
支援
センター

窓口にチラシ
と申込用紙を
置く

気になる人
に加入を
勧める

申込用紙を
見守りステーション
に送る

見守り
ステーション

自治会や
NPOとの
連携を進める

定期的
見守り開始

応答状況
などの報告
を送る

地域住民が政策提言していくための準備プロセス

地域住民が地域課題の解決に自ら主体となって活動に取り組み、実績が積み重ねられ一定の段階に達すると、行政との関わりが大きなテーマになる。地域からのボトムアップで、草の根のセーフティネットを社会的な仕組みとして政策提言していった活動のプロセスを検討した。特に、最も見えにくい準備段階のプロセスを、関わりあうステークホルダーに分けて、右図のように整理した。

(例) 見守りの仕組みを導入するための準備スキーム

目的		地域	専門機関	行政
ステークホルダーの情報収集	情報収集	地域の活動団体の情報を収集	地域医療や訪問介護に関心のある専門機関を調べる	政策や担当部署などを調べる
共感者の抽出と連携先の選定	活動開始	活動団体を訪問する	専門機関への紹介者を探す	自治体の担当部署を訪問する
広く周知していく活動とリーダーの育成	講座実施		個別ヒアリング・訪問・説得	
	個別打ち合わせ		講演会・シンポジウム・講座 開催	
地域ごとの合意形成 広報サポート	稼働準備	地域ごとの合意形成 広報サポート	地域個別相談会/学習会 開催	導入のオリエンテーション 担当部署への説明 協力支援関係の構築

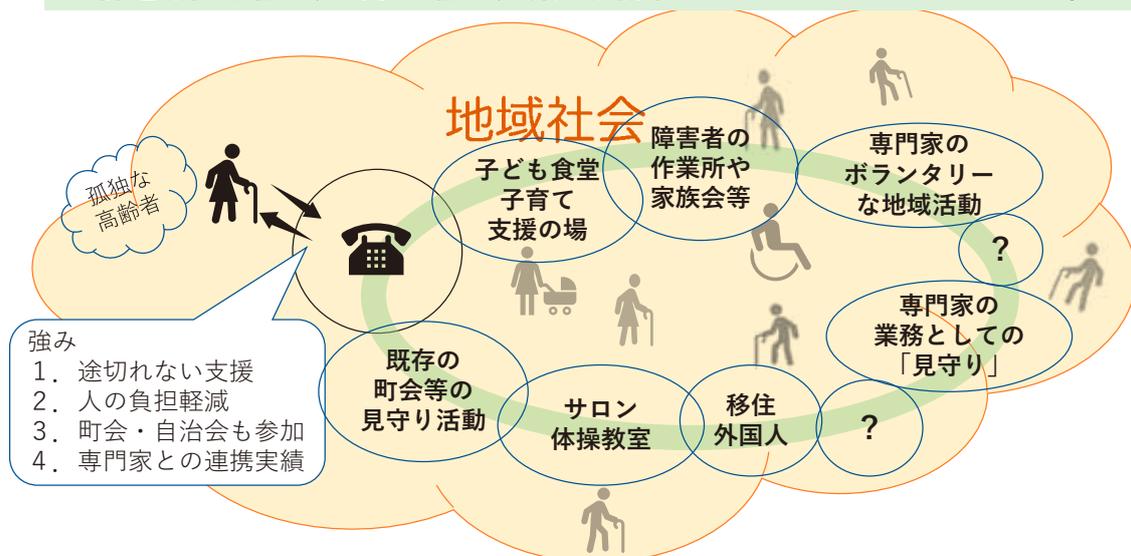
地域と暮らしからのアドボカシー

草の根のセーフティネットづくり

あんしん地域見守りネット「地域連携チーム」活動報告

地域連携チーム代表 谷口起代（合同会社共創ラボ 代表）

様々な形で地域の見守り活動をしている人たちが連なり、交流し、課題を出し合い、励まし合い、解決を模索していくプラットフォームへ。



見守りの形態には、サロンなどの場による見守りから、ご近所で緩やかに気にし合う関係性、定期訪問などたくさんある。これらに共通していることとして、ケアの視点を持って活動する者の所には、住民にしても専門家にしても、様々な情報が集まるといふことがある。それらが有機的に連なることが、自ら助けを求めることが難しい人をも支えられるセーフティネットの構築につながる。そこで「あんしん地域見守りネット」では、2019年度新たに「地域連携チーム」を発足し、地域で活動をする者が「見守り」をキーワードに連なるプラットフォームづくりを目指す活動に取り組んだ。

高齢社会の困難を乗り越えて、次世代に希望をつなぐために

地域福祉から、継続可能なソーシャルビジネスへ

あんしん電話事業は、活動の推移の中で、「医療介護モデル」から「地域福祉・生活モデル」へ移行した。見守り活動の視点から読み取れば、「専門家の指示による見守り活動」から、「地域住民の経験的な判断による見守り活動」へと移っていったのである。

つまり、見守りに関わった地域住民が、ITを活用した安否確認の集積データから地域全体の傾向を把握できるようになると、個人的な経験を重ね合わせて、的確な判断がしやすくなる。この迅速で効率的な見守り活動は、地域住民の自発性を引き出し、自然発生的に広がっていったと思われる。

クラウド型地域見守り電話「げんきです」は、地域見守り活動が必要とするシステムとして、開発された。この仕組みは、地域のコミュニケーションを高めることを目的にしている。サービスを導入するのは、自治体や地域団体、高齢者の支援団体などが想定されており、支援者が使うツールとなっている。

一方で、地域住民の主體的な活動の要素が強まるにつれて、あんしんネット内部では、見守り活動費の捻出や事業継続性についての議論が起こるようになった。資金調達が大きな課題となってきたのである。さらに、コロナ禍による潜在的な不安の表出は、新たな支援対象層を浮かびあがらせてきた。これまで、あんしん電話事業は、社会貢献活動の一環として地域活動として無料で利用サービスを提供してきたが、コロナ禍をきっかけに、事業の対象者層が広がり、地域活動を基盤に持ち収益事業を行う持続可能なソーシャルビジネスとして可能性を引き出したのである。

ここに来て、やっと、「あんしん電話事業」は、独居高齢者の支援という枠組みから一歩踏み出し、「人」と「お金」が両輪となって、つながりとコミュニケーションを生み出すビジョンを描くことができたのである。このビジョンをカタチにして、高齢社会の課題を乗り越えて、次世代につなぐ希望としたい。

残された課題は、けん引する人々、担い手である。

対談 担い手がいなくては、続かない

ソーシャルビジネスのけん引力となる退職シニアの力



ボランティアからソーシャルビジネスとして収入のある持続可能な活動へと形を変えてきたあんしん電話事業。その柱として期待されるのは退職シニアのスキルです。ソーシャルビジネス化には、地域でいろいろな社会的経験や特技を持つシニア、特に営業面で説明をしたり関係を構築したりすることを得意とする人が主軸となる必要があります。シニアは若い人よりものごとを迅速にマニュアル化することができ、定型化したものの考え方をする能力に長けています。多くのシニアが経験値の高さを生かし、社会活動の輪の中に入ってほしいものです。ここでは現役時代のスキルを生かして地域活動にまい進するお二人の対談をご紹介します。



退職後はどのような活動を考えていましたか

倉田 僕は今年3月末に退職しましたが、フリーになったら何をしようかと考えていました。広報まつでもいろいろボランティア活動の募集を目にしますが、僕は転勤族で地域の知人が皆無に等しいため、地縁のない所で健康体操や子ども食堂のような活動に足を運ぶことは難しいと思います。

遠松 自分からまったく知らない人たちの中に入って行動を起こすのはハードルが高いですね。63歳で役職定年となったときに、勤務形態を週2日勤務で選択し、65歳までの完全リタイアまで2年間で定年後の予行演習期間にしようと思いましたが。しかしコロナになって状況が予期せぬ方向に変わり、予行演習が十分でないまま退職を迎えてしまいました。

倉田 コロナは予想外のハプニングでした。コミュニケーション自体ができなくなってしまったのですから。知らない人に対するコミュニケーションに二の足を踏む気持ちは私もわかりません。同じ会社で共通言語の仲間等、価値観が一緒でないとなりがりがない、だから地域活動にハードルが高いと思ってし

まうのかもかもしれません。その点、現役の時の業務に接点がある地域活動や公益活動ならば、入っていきやすいでしょう。

遠松 会社と違って地域生活はずっと続くと思うと、知らない場所で人間関係がこじれることを想像して尻込みしてしまいます。だからコミュニティに入るとしたらもっと広域で探そうと思っていた矢先にコロナになって集う機会がなくなってしまいました。

倉田 自分の地域にもココットが行った新宿区の生涯現役塾(注)のような場があれば、地域活動へのきっかけとして有効だと感じます。

(注) 新宿区の生涯現役塾・・・2008、2009年にココットが新宿区の業務委託で行ったシニア活動の提案・支援による体験プログラム。ここからボランティアや趣味をテーマにさまざまな活動グループが生まれた。このプログラムが見守りボランティア育成講座となり、そこでスキルを身につけた人が違う地域でも同様の活動を組織しており、再生可能、持続可能な活動が実現している。



MEMO

非営利型一般社団法人 あんしん地域見守りネット (通称：あんしんネット)

一般社団法人あんしん地域見守りネットは、2013年、「地域見守り連絡会」を前身として、千葉県松戸市内のあんしん電話地域見守り活動に取り組む町会・自治会やNPOによって立ち上げられた。2017年3月に、一般社団法人格を取得した。現在、千葉県松戸市の補助事業「あんしん電話事業」の運営を担っている。また、元気な高齢者や退職シニアの活躍サポートや、自動応答電話による地域見守り事業の普及活動に取り組んでいる。

あんしん電話事業

千葉県松戸市の住民組織が取り組んでいる自動応答電話による地域見守り活動の事業名称。現在、この見守り活動は、オンラインで自動発信受信を行うクラウド型地域見守り電話「げんぎです」により、全国展開できる事業に成長している。

特定非営利活動法人コミュニティ・ コーディネーターズ・タンク (通称：CoCoT ココット)

CoCoTは、2004年地域課題解決に取り組むNPOの支援と専門職としてのコミュニティコーディネーターの育成を目指して活動を開始した。2006年、特定非営利活動法人を取得。2011年より、あんしん電話地域見守り活動の運営をサポートし、2017年より一般社団法人あんしん地域見守りネットの事務局を担っている。2012年からニッセイ聖隷健康福祉財団の豊かな高齢社会システムづくりの実践的調査研究を受託して現在に至る。千葉県松戸市と大阪市に拠点を持つ中間支援組織である。

お二人はニッセイ聖隷健康福祉財団の調査研究に携わり、その活動が退職後の選択にどのような影響を与えましたか

遠松 退職前後の岐路にさしかかったとき、調査研究の仕事を通じてご縁があったココットのお手伝いがかからもできたらいいなあと漠然と思っていました。そして関西地域で私の人脈を通じてあんしん電話について声をかけていたところ、興味を持ってくれた自治体があったのでアプローチをかけ、そうしながら自然とココットさんに加わって、これまでの仕事の延長線として活動を続けています。

倉田 私も遠松さんと同じように、現役の最後のところで関わった業務と知識を生かすことでココットとあんしん電話の組織作りの一端をお手伝いしています。あんしん地域見守りネットの中核でやっている皆さんたちとは違い、私は地域活動にはまったくの未経験ですが、ココットに関わったことで地域活動に参加する人たちを知るようになりました。ニッセイ聖隷健康福祉財団がココットに研究を委託し、業務として私に関わったことが、退職後の今につながっています。まさに現役時代の業務がきっかけでラッキーだったと思います。

遠松 そうですね。私も倉田さんも現役のころの業務から退職後の地域活動へと自然に進むことができたのはラッキーだと思います。しかしそうでなくても、在職中に何かサポートがあれば、もっと多くの人が自然に地域活動に入っていけるのではないかと思います。

倉田 その後押しになりそうなのが、4月から施行される「改正高年齢者雇用安定法」です。事業主に70歳までの就業確保が努力義務として設けられることになったのです。面白いのは、定年制の廃止や定年引上げができない場合であっても70歳まで継続的に従事できる事業が挙げられていることです。一つは、

事業主が自ら実施する社会貢献事業や事業主が委託出資等する団体が行う社会貢献事業に定年を迎えた人が入れるようになったこと。僕も現役のときに outward 先の団体の公益財団法人への法人化を担当しました。あんしんネットのサポートはこのときの経験を生かしたものです。同様に、企業が自ら行っている社会貢献事業に、退職した人を橋渡ししてあげれば、多くの人が地域活動へと入っていけると期待しています。



この法律は企業への努力目標を示すものではありませんが、今は企業もさまざまな地域貢献をしていますから、寄付や委託研究を依頼している先に一定の経験を持った人を提供することができます。社会貢献事業を行うような組織は社員も多く抱えているはずなので、定年退職した人の生きがいや居場所につながることを、企業にはぜひ取り組んでもらいたいです。

遠松 地域活動で社会に貢献したいという人がいたら、橋渡しをする人がいたらうれしいですね。

退職後の時間を地域活動に使うことの良さと、そのための課題にはどんなことがありますか

遠松 退職後は行動範囲も狭くなります。地域の身近な所で仕事をしたい人もいれば、周辺地域で活動したい人もいます。地域デビューを意識するなら現役のころから自治会活動に参加したり、自治会サークルに参加するのもいいと思います。ただ若い時はなかなかそこまで見越して行動しないかもしれません。

倉田 助走期間として現役の時から始めれば理想ですね。

遠松 そう思います。現役のときに、退職したらこのありあまる時間をいかに楽しく使うかということは意識しておくとういと思います。

倉田 それは居場所をどう確保するかの問題でもありますね。

遠松 一つの方策として、趣味のサークルに所属することも選択肢にありますね。ボランティア活動では、純粋にボランティアをしたい人もいますが、仕事をしてきた人は

有償ボランティアのほうが、お小遣い稼ぎになる点で、魅力的な選択肢かもしれません。経済的に余裕がある人ばかりではありませんから。

倉田 そうですね。年金生活が始まりますからお弁当代くらい出るような有償ボランティアのほうが長く続けられるでしょう。小遣いが減らない程度の収入でもモチベーションになります。私も酒代と新聞代、新刊書籍代など落としたいくない領域は保ちたい。そうなると、小遣い稼ぎ程度でいいから、現役のときのようにストレスのたまるようなことのない範囲で、現役の延長である隣接分野の仕事をして、わずかでも収入があるほうがいいと思います。

遠松 また有償だとそのボランティアの継続性にもつながる気がします。退職したら誰でもフルに稼ぐ時代は終わります。もし地域活動を担う人が続かない理由の一つに、無償のボランティアだからという点があるならば、考えていく必要があるでしょう。

倉田 そう思います。

遠松 第二の人生は違う習慣が始まる過渡期ですから、地域に何かしたいというのは理想ですが、それは一つの選択肢であり、趣味やほかの選択もあっていい。ただ地域は身近だから活動しやすく交通費などお金もかからず手軽です。それが地域活動の良さです。

私は退職したときに、諸先輩から「得意分野を生かせることができたなら一番幸せですよ」と言われた言葉が心に残っています。加えて自分がそれをしたいかどうかです。これから地域デビューしたい人は、自分に何ができるかと思ったとき、やはりこれまで仕事でやってきたことだったら、少なくとも業務の言葉が通じます。私が高齢者分野の仕事をしてきたことでココットの今の活動のお手伝いできてるように、皆さんも現役のときのスキルと人脈を使って人と人を引き合わ



せたりできれば、活動が広がっていくのではないのでしょうか。

倉田 それには別に確固たるスキルがなくても十分で、私もかつて老人ホームで働き、資料や制度を作ったりした経験を今役立てています。現役のときの仕事をベースに活動ができればいいのです。私はあんしん地域見守りネットでお手伝いしながら、子ども食堂や団地の自治体をやっている人の大変さを見てきました。中核で活動する人たちのように率先してはできないけど、お手伝い的なことならできます。地域活動では、事業を立ち上げる人もいれば、参加するだけの市民もいて、いろんな関わり方があります。自分に合った関わり方でとりあえず足を踏み入れることが大切です。

——今日はどうもありがとうございました。

対談者



倉田 久さん

元・公益財団法人ニッセイ
聖隷健康福祉財団事業企画
推進部 松戸募集広報室長

松戸市内自治会のネットワーク組織「地域見守り協議会」の法人格取得をサポートし、2017年一般社団法人あんしん地域見守りネットの設立に寄与した。現在、一般社団法人あんしん地域見守りネットの地域連携チームのメンバーとしてニュースレター「地域活動を育む『かけはし』」の編集長として活躍している。



遠松健史さん

元・公益財団法人ニッセイ
聖隷健康福祉財団常務理事
事務局長

2012年地域見守り活動「あんしん電話」の先進性を見出し、8年間にわたる実践的調査研究の推進役となった。退職後は、その先見の明と行動力を活かし、あんしん電話事業を、退職シニアを巻き込んだ持続可能なソーシャルビジネスに成長させるべく、大阪拠点の設立に奔走している。

実践的調査研究が目指したもの

☆高度成長期以降の時代の変化に取り残された団地から始まった、住む人の手でつながりとコミュニティを取り戻すための試みの記録

☆自動応答電話「あんしん電話」を活用して、社会的孤立の課題に取り組む地域見守り活動の広がりの記録

8年間の調査研究の歩み

期	期 間	テ ー マ	得 た も の
1期	2012年10月 ～2014年9月	高齢社会における安心なまちづくり調査研究（梨香台団地を事例として）	梨香台団地で始まった自動応答電話「あんしん電話」を活用した見守り活動とつながりの仕組みを調査した。
2期	2014年10月 ～2016年9月	地域の多様性を活かした高齢社会におけるまちづくりの方策の検討（松戸市の地域見守り活動を事例として）	自治会を中心としたネットワーク組織地域見守り協議会の立ち上げプロセスと、見守り活動の核となるコミュニティサロンや見守りボランティアの必要性和機能を分析した。
3期	2016年4月 ～2017年9月	高齢社会における住民主体のまちづくりの調査研究（住民主体活動による「あんしん電話」導入事例の検証を通して）	法人格を取得し、「一般社団法人あんしん地域見守りネット」として、地域包括支援センターへの導入と、理念を具現化し公共サービスの継続性と安定性を持つためにシステムの開発に取り組んだプロセスを検証した。
4期	2017年10月 ～2019年9月	高齢社会における公共性の高い福祉サービス事業「あんしん電話」の包括的調査研究	社会的に孤立化する高齢者の支援策として、対象、仕組み、組織、政策それぞれに、必要な要素を整理し、住民の手による公共サービス事業として概要を明らかにした。
5期	2020年1月 ～2021年3月	社会的孤立状況にある高齢者を継続的に支えるソーシャルビジネスの可能性を探る	経営基盤づくりと信頼性の高いシステムによりビジネスモデルを描き、地域社会と多様な主体との連携により収益性のあるソーシャルビジネスとしての可能性を提示した。

公益財団法人ニッセイ聖隷健康福祉財団 豊かな高齢社会システムづくり実践的調査研究報告

2021年4月発行

調査研究・受託者 NPO 法人コミュニティ・コーディネーターズ・タンク(ココット)

代表理事 小山淳子

〒271-0073 千葉県松戸市小根本 42-3 アセット松戸Ⅱ 401

TEL 047-712-2868 FAX 047-369-7445

表紙 photo : plants_ka/PIXTA

